

NAMサミット随記

大村哲

[参加登録]

非同盟諸国（NAM）首脳会議に4名が参加することになり、田中代表理事が、在日アゼルバイジャン大使館、カイロのAAPSO事務局と連絡をとりながら交渉し、直接アゼルバイジャンの非同盟諸国首脳会議事務局にメールや電話を何度もして、首脳会議参加登録の方法が分かった。参加登録には、AAPSOメンバーであること、顔写真、到着日時、到着する飛行機の便名、出国日時、出国する飛行機の便名などを、4名がそれぞれアゼルバイジャンの首脳会議HPに入力する必要があった。

[到着するとVIP待遇]

10月23日（水）AM11時半ごろ、バクー市の国際空港に到着した。飛行機と空港ビルをつなぐ通路の途中に、名前を書いた紙を持っている係員がいた。「これ私だ！」と言うと、パスポート、預けた荷物の番号を張り付けた航空券、入国ビザを渡すように言われた。4名が揃うと、空港ビルに行かずに、通路の途中から直接空港の地上に降ろされた。そしてマイクロバスで、空港のVIP用の出口待合室へ。しばらく待つと、入国スタンプが押されたパスポートが返され、飛行機に預けていた荷物も待合室に届けられた。休憩の後、また4名を、マイクロバスで宿泊予約してあったホテルまで送り届けてくれた。アゼルバイジャン政府による至れり尽くせりの歓迎ぶりだった。

[閣僚会議に参加]

宿泊するホテル（Boulevard Side Hotel）に荷物を置いた後、すぐNAM閣僚会議が開かれているホテル（Boulevard Hotel Baku）にタクシーで向かった。登録した顔写真が入ったIDカードを受け取り、会議ホール（Taghiyev Hall）へ。AAPSOの席を探して日本AALAの正式代表2名がそこに着席。私は、最後列の椅子が多数並んでいる場所で傍聴した。コーヒー・ブレイクや昼食休憩の時間は、他国からの参加者との交流機会だ。私はミャンマー代表団の席に行き挨拶をし、田中団長

は持って行った 3 文書をミャンマーの駐ロ大使に手渡した。



(ミャンマー代表团と記念写真撮影)

[首脳会議会場]

NAM 閣僚会議が開かれたホテルには、各国の代表团が泊まっている。各国首脳が泊まるのは、また別のヒルトン・バクー (Hilton Baku) ホテルである。NAM 首脳会議が開かれるのは、その両ホテルからは離れた場所にある Baku Convention Center だ。120 カ国以上の国・組織の人々が集うので、警備は嚴重だし、大阪で開かれた G20 サミットのように、一般車両は交通規制を受ける。そのため、両ホテルとサミット会場の間には、アゼルバイジャン政府が運営するパトカーに先導されたシャトルバスが幾便も運行された。私が乗ったシャトルバスには、北朝鮮代表团 4 名も同乗していた。

[アリエバさんに感謝]

アゼルバイジャン政府として、AAPSO (Afro-Asian People' s Solidarity Organization) のハディディ (Dr. Helmy AL Hadidi) 議長と、日本 AALA 派遣団の世話をしてくださったのが、Parvin Aliyeva さんである。

ID カードの取得から、各種連絡事項、帰国時のバス手配情報の連絡ミス of 修正などなど、本当によくサポートしてくださった。本稿を借りて感謝の意を表しておきたい。



(笑顔が素敵なアリエバさん)

[首脳会議終了後は観光]

首脳会議が終わった翌日 10月27日(日)は、観光をすることにした。7月に下見のため南コーカサス3国に行った私が、案内することになった。最初に「殉教者の小道」周辺を見学した。タクシーで着いた「殉教者の小道」入り口のすぐ側に、アゼルバイジャンの国会議事堂がある。その近くの市街には、オフィス、マンション、ホテルとして使用されている炎の形をした現代的な Flame Tower が3つ建っていた。



(国会議事堂)



(炎の形をしたビル)

最初に見学したのが、「殉教者モスク (Mosque of the Martyrs)」である。アゼルバイジャンは、人口の約8割がイスラーム教徒の国である。でも街を歩いていて女性でヒジャブ(髪を隠すスカーフ)をしている人はとても少ないのが印象的だった。インドネシアよりずっとずっと少ない!その理由は、社会主義のソ連時代は宗教が禁じられていたので、イスラーム教の戒律が緩み、イスラーム教が

世俗化したという説明を聞いた。でも、街で出会った観光客は、「イラクから来た」「イランから来た」と答える人が多く、同じイスラーム教国であるという意識は外国の方に強くあるようだ。夕食を食べた庶民的な郷土料理の店では、近くの店で酒を売っているのに、酒を出してくれない。これは、イスラーム教の影響が社会に残っている例ではないだろうか。



(殉教者モスクの外観)

「殉教者の小道」には、1990年1月20日のソ連侵攻で亡くなった人たちの墓地、1992年以降のナゴルノ・カラバフ紛争でアルメニア側との戦争で亡くなった人々を祀る墓地がある。小道を抜けた先の広場には火を燃やしている塔があり、NAM サミットに出席したバングラデシュのシェイク・ハシナ首相が捧げた献花が置いてあった。



(殉教者の小道)



(バングラデシュ首相の献花)

殉教者の小道広場から市街地の方に向かうと、カスピ海の眺めが良い場所があ

る。そこから、旧市街にタクシーで向かった。「乙女の塔」と「シルヴァンシャー宮殿」が見学目的なのだが、日本の城下町以上に複雑な道なので、道に迷い同行の3名の方に長く歩かせる失敗をした。「乙女の塔」の由来はハッキリしないが、紀元前5世紀にゾロアスター教寺院として建てられ、12世紀に要塞として建て直された。「乙女の塔」の名前は、この地を治めていたモンゴル人の王が王女に結婚を強要し、それを望まない王女がこの塔からカスピ海（昔は、この位置までカスピ海の水面が上がっていたということの意味する）に身を投げたという伝説に由来する。「シルヴァンシャー宮殿」は、13世紀から16世紀にかけてこの地を支配していたシルヴァンシャー王朝が15世紀にバクーに遷都し建てた宮殿である。内部には、王族の霊廟、謁見の間、浴場、モスクなどがある。



（バクーとカスピ海を望む）



（乙女の塔）

旧市街見学の後は、「ゾロアスター教寺院跡」を見学した。ゾロアスター教は自然崇拝の「原イラン多神教」を母体とし、BC10世紀ごろ「原ゾロアスター教」に発展したと考えられている。ゾロアスター教は光明神（善神）の象徴としての純粋な「火」を尊ぶため、拝火教とも呼ばれる。ゾロアスター教の寺院には、火が絶えることなく燃え続け、寺院内には偶像はなく、信者は炎に向かって礼拝した。AD3世紀のササン朝ペルシアは、ゾロアスター教を国教にし、イランに広がった。広く他の宗教（ユダヤ教、キリスト教という一神論。東方ではバラモン教）にも影響を与え、中国では祆教（けんきょう）と呼ばれていた。

バクーのゾロアスター教寺院は、ハイダル・アリエフ国際空港の近くにあり、タクシー料金往復で100マナト（約6400円）を請求された。地球の歩き方を見る

と、40～50 マナトが適正なタクシー料金だと思うのだが、これも「雲助ではなく正当な経済行為」というのが識者の見解だった。



(バクーのゾロアスター教寺院)

首都バクーの道路には横断歩道が少なく、信号が無いロータリー式の交差点が多かった。それで地図上は歩けそうな距離でも、歩いて目的地に行くのは至難の技であった。石油や天然ガスを産出する国の首都バクーは自動車で移動するべく設計された都市である。宿泊していたホテルから閣僚会議が開かれたホテルまで、または首脳会議が開かれたコンベンション・センターまでのタクシー代は7 マナト (450 円) である。タクシー運転手にアゼルバイジャン労働者の平均賃金を質問したところ、直接の答えは無く、例示として「警官の月給が 600 マナト (3 万 8000 円)、幹部警官の月給が 1000 マナト (6 万 4000 円)」との答えが返ってきた。観光業に従事するタクシー運転手の稼ぎがいかに多いかが分かった。

10 月 28 日 (月) は、帰国する日である。飛行機の出発まで時間があるので、この日も観光をすることにした。私は、先代の大統領を記念して建設された「ヘイダル・アリエフ・センター」と「アゼルバイジャン歴史博物館」を見学先に選んで同行の 3 名を連れて行った。行ってみると両方とも閉館。月曜日は博物館が閉館ということを事前に調べていなかった失敗である。仕方がないので、カスピ海沿いの公園でのんびり。そこでビックリしたのが公衆トイレの利用料が 3 マナト (190 円) だったこと。その後、スーパー・マーケットに行き、お土産の購入タイムとした。色々な失敗をしたが、これも貴重な体験だった。

以上は、日本 AALA 派遣団が体験したアゼルバイジャンである。首都バクーは、商業、観光と政治を中心になりたっている。アゼルバイジャンという国全体では、また別の側面も持っている。私が 7 月にアゼルバイジャンを観光で訪れたときは、郊外をバスで走った。各種工場がバクー郊外に建っているが、工場の建物を外見だけ見ただけで産業の水準が想像できた。郊外には農村もある。アルメニアに占領されたナゴルノ・カラバフ近くには、戦争避難民が暮らしている。その人達に対する経済的支援は十分ではないとの報道もある。